

「挨拶」

この度は、展示にお越しいただきありがとうございます。この展示のタイトルになっているジョナサンというのは、作家リチャード・バックの『カモメのジョナサン』<sup>1</sup>に出てくるジョナサンを指しています。有名な小説なので読んだことがある方も多いと思います。カモメのジョナサンが餌を取るために飛ぶのではなくて、純粹に飛ぶ事を楽しみを見出し、周りのカモメから馬鹿にされつつも修行を積んで、えげつないスピードで飛ぶ術を身につけて、スピードの速いカモメたちのいる高次の世界に行って、、、みたいな話です。食うために飛ぶのではなくて、飛ぶために食うのですね、他のカモメと違って。作家で言えば、食うために作るのではなく、作るために食うという感じでしょうか。それはどうでも良くて、カモメのジョナサンという話が3章までの構成だったのですが、何年か前に、かもめのジョナサンに続きの第4章を加えた、『カモメのジョナサン 完成版』が出版されました。第4章はジョナサン亡き後の世界を描いてて、神格化されたジョナサンの教えは形骸化して、カモメワールドもすっげえ閉塞感が漂って、若いカモメはジョナサンの教えの通り飛ぶ修行をせずに、ジョナサンがどんな人物だったか調べたり、ジョナサンの偶像崇拜したり、ジョナサンの目の色がどんなだったとかばっかり話すので最悪、こんな世界は嫌だと思ったあるカモメが自殺しようとして速い速度で地面に落下しようとした瞬間に光るカモメ(ジョナサン)に出会うって感じでした。

漫画の『僕はビートルズ』<sup>2</sup>に出てくる言葉を拝借すれば我々は冒険され尽くした世界の探検家で、もう面白いことは大体昔の人たちがやっちゃったからそれを研究してるだけで面白いのです。刺激的だし。ジョナサンの目の色がめっちゃ気になってるカモメなんだと思う僕は。彼らみたいに偶像だったまに拝むし、それが高じて偶像を作ったりします。ジョナサンは神様なので、ジョナサンの目の色を突き止めることは、ジョナサンの人種を突き止める事にもつながる。気になる。

ただただサンプリングを繰り返して、そこから生まれた作品の謎が、過去の歴史と応答するかもしれない。まあそれはそれは楽しい。

---

<sup>1</sup> 『カモメのジョナサン』 (1970)

アメリカ、イリノイ州出身の小説家、リチャード・バック (1936-) による小説。1970年にアメリカで出版され、男性優位の価値観を否定するカウンターカルチャー、ヒッピーの影響から徐々に広まった小説としても有名である。

<sup>2</sup> 『僕はビートルズ』 (2010-2012)

原作者、藤井哲夫による漫画。漫画家、かわぐちかいじ (1948-) による作画によって、講談社の週刊漫画雑誌、『モーニング』の中で2年に渡り連載された。イギリスのロックバンド、ビートルズ(1960-1970)のコピーバンドがビートルズデビュー前にタイムスリップしてしまい、過去作品の盗作を行う中でデビューしてしまう物語。

カモメといえば、チェーホフの「かもめ」<sup>3</sup>は第4章までの戯曲で、第4幕でカモメを撃ち殺したトレープレフが自殺します。昔、三重県の第七劇場という劇団がやっていた「かもめ」が自分にとって初めて観たプロの劇でした。当時、高校生だった自分はチェーホフを知らなかったので内容がチンプンカンプンだったのです。最近、コロナの影響でいろんな劇団が過去公演をオンライン上にアップしている中に、彼らの「かもめ」も見つけました。観たら、それはチェーホフを引用しつつ、別のお話として作られていました。そっかそりゃあ高校生の自分は内容がわからないやと思いました。その劇はかもめの第4章後の世界を作っているように見えました。トレープレフが死んだ後も世界は続いていくし、ラブロマンスの大団円の後も、原発が燃えた後も、コロナ後でも、太陽が爆発した後も、自分が死んだ後も、世界の続きはあるのだということですね。第4章の後の世界が確実にあるのです。

たくさんの「もの」や「こと」を引用した作品を作るのは、前を見ながらただ歩くんじゃないかと、歩きスマホをしながら歩いているような感覚です。歩きスマホ大好き！ 歩きスマホが原因でトラックに轢かれて死んだら異世界転生したいです。

#### 「カモメについて」

最近なんかしらの外国の記事でバナナのアートにおける地位が失落したみたいなのを読みました。記事が全部英語だったので半分くらい何書いてあるかよくわからなかったのだけど、昔、ポップアート<sup>4</sup>の象徴みたいな扱いを受けていたバナナだけでも、今はなんかアンダーグラウンドにいるんだバナナは、みたいなことが書いてあった気がします。

バナナを扱った作品を初めてみたのは、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのウォーホールのジャケット<sup>5</sup>でしょうか。バナナを高めへ押し上げたのはウォーホールっぽい気がします。

---

<sup>3</sup> 「かもめ」 (1895)

ロシアの作家、アントン・チェーホフ (1860-1904) による戯曲。チェーホフの中では、初期の「プラトーフ」(1878)、「イワーノフ」(1887)、「森の精」(1889) の中に含まれる「四代戯曲」最初の作品である。

<sup>4</sup> ポップアート

正式名称は、「ポップ・アート」。「ポップ」の語源は、ポピュラー (popular) の略称から来ており、大衆文化を意味している。1950年代から英国や米国、アジア圏などの各国で作家たちが抽象表現主義の反発として、雑誌や広告、商品、コミック、テレビ、映画などの当時流布されたイメージを用いた作品が制作された。この語は、こうした傾向に対し、批評家、ローレンス・アロウェイ(1926-1990)が54-55年頃から使い始め、次第に定着したとされる。

<sup>5</sup> ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのウォーホールのジャケット

アメリカの芸術家、アンディ・ウォーホル(1928-1987)がプロデュースしたロックバンド、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドが1967年にリリースしたアルバム「ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ」のジャケットを指す。ウォーホル自身が描いたバナナのジャケットが用いられており、通称、バナナ・アルバムとも呼ばれている。

バナナっていういろんな意味合いで使われるそうです。白人思想の黄色人種はバナナと呼ばれたり、貧しい国で作られて裕福な国で売られるので貧富の象徴だったり、男根のメタファーになったり、最近だとポーランドで女性がバナナを食べる映像作品の撤去に対するデモ<sup>6</sup>でたくさんの方が美術館の前でバナナ食べたりしてました。

そんでもってマウリツィオ・カテランがマイアミアートバーゼルでバナナを磔刑が如く壁にダクトテープで貼った作品<sup>7</sup>が 1300 万円くらいで売れて話題になっていましたね。それをパフォーマンスアーティストのおっさんが食べてまたニュースになったり。

一時期はアート界の神くらいにまでなった崇高なバナナがは、大衆のものになってそんでもって、最終的には磔刑になって、たったの 1300 万ぽっちになって、おっさんに喰われてバナナかわいそう。しかもカテランは最初バナナを FRP とかで作ろうとしたらしいのだけど、本物のバナナ貼ったんですよ。偶像じゃなくて、本物使ったのもうバナナ逃げ道ない。はいバナナもうオワコン。3 日で復活しなかったし、かわいそうバナナ。

それで思ったんですけど、飛んでるカモメってバナナっぽいですよ。見た目が。カモメはバナナと違って、まだ崇高な存在感を保っている気がします。しかし、ただの食べ物がある高次の世界にあって、神様にそのまま食べられてしまうというのは、『カモメのジョナサン』のパロディの『ニワトリのジョナサン』<sup>8</sup>に出てくるジョナサンと境遇がかぶるような気がします。

---

<sup>6</sup> ポーランドで女性がバナナを食べる映像作品の撤去に対するデモ

2019 年 4 月 29 日付に起こった事件に反応したデモ。ワルシャワ国立美術館に展示されたポーランド出身の作家、ナタリア・LL (1937-)による作品、《消費者アート》(1972)が「多感な若者を刺激する」という美術館の意向によって撤去された事件に人々が反応し、デモに参加した人々は撤去された写真に映る裸の女性がバナナを食べる、あるいは舐める姿を真似した。作品自体は、当時贅沢品だったバナナを「消費」すると同時に、性的なモチーフと消費活動を結びつけた内容となっている。

<sup>7</sup> マウリツィオ・カテランがマイアミアートバーゼルでバナナを磔刑が如く壁にダクトテープで貼った作品

イタリア出身のアーティスト、マウリツィオ・カテラン(1960-)による作品、「コメディアン」(2019)を指している。アメリカのアートフェア「アート・バーゼル・マイアミ・ビーチ」に出展され、アメリカ出身のアーティスト、デビッド・ダトゥナ(1974-)が最終日の前日にバナナを壁から剥がして食べてしまう。この行為に対し、出展したフランスのギャラリー、ペロタンは法的責任を要求しなかったが最終日に本作の撤去を発表している。

<sup>8</sup> 『ニワトリのジョナサン』(1973)

「ボードビル」

ボードビルというものがあります。ウィキペディアでは17世紀にパリに登場した流行歌を交えた演芸の形式だと書いてありました。歌と会話を繰り返す演劇みたいな。アメリカとかでは舞台を使ったショービジネスのことを指すのだとか。日本語に直すとやっぱり、大衆演芸みたいなことなんだと思います。違うかもしれませんが、軽い音楽が軽音なら、軽い演劇で軽演劇とでも言いましょうか。

おそらく、みんなが好きな笑いや歌を詰め込んだとにかく俗っぽい舞台だったと思うんですけど、やはりそういうものは面白いですね。浅草の大衆演劇とかも楽しい要素がてんこ盛りで見にいくと、満足感がすごいです。

チェーホフはボードビルがすごい好きで熱心に通ったとか。井上ひさし<sup>9</sup>氏の書いた戯曲の「ロマンス」はチェーホフの半生をモチーフにしています。その戯曲の中でもチェーホフがボードビル好きで、面白いボードビルを書きたいとずっと思っている様子が描かれていました。彼のシリアスに捉えられがちな名作もボードビルの形式をモチーフにしているのだと言われていました。1896年のチェーホフの「かもめ」の初演はロシア演劇史に残る大失敗だったそうです。（実際にはそこまで不評でもなかったという説もあり）当時の演劇は俳優のキャラクター優先の過剰な大袈裟な演技が主流だったそうで、カモメという繊細な内容の戯曲と最悪な組み合わせだったらしく全く受けなかったそうです。その後、失敗のトラウマで再演を嫌がるチェーホフを、当時に出来立てだったモスクワ座という劇団の演出家のコンスタンチン・スタニスラフスキーがなんとか説き伏せて、上演したそうです。それは失敗した初演のような過剰な演技はなしで、とにかく役者を劇の中のキャラクターとして自然な演技をさせたそうです。スタニスラフスキーは自然な演技の新しい演劇を作ろうとして、それを受け入れてくれる新しいお客さんに舞台を見てもらうために入場料もうんと安くして、演劇好きのお金持ち以外もかもめを見られるようにしたそうです。そして繊細な脚本と、自然な演技が見事に合い、そのモスクワ座のかもめは大成功したそうです。

今回の自分の個展でも短い劇をやろうと思います。10分くらいの軽演劇です。今や舞台をすることが難しくなってしまったご時世ですが、透明な幕を締め切って演技をします。普通

---

アメリカ、イリノイ州出身の小説家、リチャード・バック(1936-)による『かもめのジョナサン』(1970)をニュージャージー出身の小説家、ソル・ワインスタイン(1928-)とニューヨーク州出身の小説家、ハワード・アルブレイトによってパロディ化した小説『ニワトリのジョナサン』(1973)を指している。

<sup>9</sup> 井上ひさし(1934-2010)

山形県出身の小説家。上智大学在学中からストリップ劇場、フランス座の小喜劇を中心に台本を書き始める。大学卒業後、「ひょっこりひょうたん島」(1964-1969)の放送作家として活動。「ロマンス」(2007)は、晩年期の作品。

幕が閉まるのは演劇の終わりですが、なんだか終わりから何かが始まることもあるのかも  
しれないと最近思うのです。

「サッカー」

プロ作家たちを集めてサッカーをしました。

映像に出ている作家は、全員美大、芸大を出た作家です。

この世の人たちは皆、作家に憧れています。チェーホフのかもめに出てくるキャラクターの  
ソーリンはどんな小さな作家でもいいから、作家になれば自分の人生はもっと楽しかつ  
ただろうと劇の中で話しています。彼らの夢を背負った作家たちが、サッカーをやります。  
日本のプロサッカーも盛り上がってきていて、子供たちはプロサッカー選手に憧れます。海  
の向こうで行われるサッカーの大きな大会に夢を見ます。

しかしどういうわけか、彼らは大人になると、胸を焦がすように作家に憧れてしまうので  
す。

「どんなに小さくてもいいから作家になりたい。

美大と医大は同じくらい金かかる。

医者と作家は同じくらい儲かるからだ。

医者と作家なら作家の方がいい。そっちの方が楽そうだし。

もちろん貧乏な作家もいるだろうけれど、ものすごく儲かっている作家もいるわけだから  
彼らの収入を足して割れば、大体医者と同じくらいになるだろう。

だから僕は作家になろう。

チェーホフだって元々医者だったのに作家になったじゃないか。」

ーピョートル・ニコラーエヴィチ<sup>10</sup>

---

<sup>10</sup> ピョートル・ニコラーエヴィチ

チェーホフの「かもめ」に出てくる人物名。劇中で作家という職業への憧れを口にするが、上記のようなセリフは「かもめ」の中に存在しない。

「ライオン」

ライオンの像にいろんな意味を込めて銀行とかマンションとかの前に置いとくことが多いです。家族愛を意味していたり、強いぞという意味だったり、様々なコンセプトでおかれることが多いです。去年2019年の5月の1ヶ月間レジデンスで初めて香港に行ったときに、香港のHSBCという銀行の存在を知ったのですが、その本社のビルの前には2匹のライオン像がシンボルとして置かれていて、そこから発行されているお札にはそのライオン像の写真がプリントされています。(ちなみに香港は3つの銀行がお札をそれぞれのデザインで発行しているので、種類がたくさんあって面白いです。)

HSBCはLGBTを積極的にサポートしている企業だそうなのですが、それで、ある時(2016年)HSBCは本社前のライオン2匹をそのキャンペーンの一環として、レインボーカラーに塗って、その写真と一緒にLGBTをサポートする運動を促す投稿をFacebookにしたのですが、それが大炎上しました。コメント欄が荒れに荒れ果て、「素敵な試みですね!」などという賛成意見もたくさんあったのですが、「こんな偏った価値観の銀行もう使わない」とか、あんまり書きたくないので書きませんが、否定意見がかなり出ました。ちなみにライオンを塗ったのは香港のマイケル・ラム<sup>11</sup>というアーティストの方だそうです。塗られたライオンの写真だけ見たのですがなかなか綺麗でした。けれども否定派が集まって銀行前で抗議活動まで起こり、ライオンのレインボーカラーの塗装は剥がされました。

そして最近、HSBCは逃亡犯条例に反対するデモ隊の支援団体の寄付金口座を凍結しました。それに対し非難が相次ぎ、一部の人たちから店自体が攻撃を受け、店舗の前のライオン像の目玉は、彼らに赤く塗られました。2体のうち1匹には火がつけられたそうです。人間は道具を使って、仲間を集めて、スマホを作って、電波を飛ばして、火を放って、今まで勝てなかったライオンを倒して、銅像にしました。それは家族愛の象徴で、強さの象徴で、LGBTのサポートキャンペーンで虹色に塗られたり、抗議を受けて色は剥がされ、混乱の最中に目を赤く塗られたりしました。

洞穴に人間が住んでた時、僕は体が強くないので多分、狩りの係じゃなくてみんなが住んでる洞穴に絵を書いたり、粘土とか土で立体を作って帰ってきた狩りの係の人を盛り上げる「洞穴飾り付け係」だったと思うのですが、狩りの係の人がライオン倒したよって報告してきたら洞穴の前に粘土とか、木とか、石とかでライオンの像を作ってみんなを盛り上げたのでしょう。それもたまには塗ったり、燃やしたりしたのでしょうね。

---

<sup>11</sup> マイケル・ラム(1977-)

香港出身の画家。筆の筆触を特徴とした抽象絵画を得意とする。

時は戻り現代、ひとしきり憤ったりはしましたよ。彫刻自体に心など宿っていないので、ライオンの像がかわいそうとかは1ミリも思っていませんが、ライオンのまわりで起きている事に憤ったりしました。

「黄色いバター」

『ちびくろサンボ』<sup>12</sup>に出てくる、虎たちがぐるぐる回ってバターになるシーンが好きでした。

あの虎のこと自分はずっとライオンだと思っていました。小さい頃は牙がある大きい猫みたいな生き物は全部ライオンだと思っていました。小さい頃、祖父母の家が保護猫をたくさん飼育していたのですが、それを見ながらデカくなったらこいつらはライオンになるだろうと思ってました。その保護猫の子供の1匹を今も実家で飼っています。今年で17歳の超老人なのに病気もしていない白猫です。ヨボヨボではあります。それと黒猫が2匹います。4歳と6歳くらいのこれまた保護猫です。3匹でよく喧嘩している様子を母親からラインで送られてくるので、それが日々の小さい楽しみです。

そういえば、『ちびくろサンボ』って絶版になってるんだっけと調べてみたら普通に売っていて買うことにしました。絶版になったけど、それは法的に出版してはいけないと決まっているわけではないので、出版社の裁量で売るかどうかは決めていいらしいです。その絵本の説明には、かつて絶版としたけれども会社内で協議をして、この本に差別的な意図はないと再販するに至った経緯について書かれていました。

元々、スコットランドの絵本作家のヘレン・バンナーマン<sup>13</sup>が自分の子供に読ませるために、『ちびくろサンボ』を書いたそうで、その時は主人公のサンボは南インドの子供でした。

---

<sup>12</sup> 『ちびくろサンボ』 (1899)

スコットランドの作家、ヘレン・バンナーマン (Helen Bannerman, 1862-1946) によって手作りで生み出された児童文学。知人を介してイギリスの出版社、グラント・リチャーズ社から作家の絵を用いた形で1899年に出版される。本書の特徴として、原作の著作権が存在せず、様々な海賊版によって主人公の表象のされ方が度々問題となっている。アメリカでは、海賊版が流通し、一部の書籍では主人公、サンボのイメージがインドの少年からアメリカに住むアフリカ系少年に置き換えられている。日本でも1953年、岩波書店から出版されるがアメリカと同様に70種類を超える海賊版が流通し、作家の絵が使われていない書籍が定本となる。

<sup>13</sup> ヘレン・バンナーマン (Helen Bannerman, 1862-1946)

これはその時、ヘレン・バンナーマンが、夫のウィリアム・バーナーマンのインドでの伝染病の予防の仕事を手伝う形でインドに滞在していたからだそうです。

インドに滞在していましたが子供は教育のためにイギリスに住まわせていたそうで、子供が寂しくないようにと手作りの絵本として『ちびくろサンボ』を送ったそうです。

それは、1899年に出版されたのですが、その時一緒に海賊版としてサンボがアフリカ系の黒人として書かれたものが出回ったそうです。それが原因でちびくろサンボ＝黒人というイメージのまま、ベストセラーとなりました。お話が面白くて、子供にも人気で、最初は黒人に対するイメージの向上につながる推薦図書扱いを受けていたけれども、公民権運動が盛んになるにつれてサンボの戯画的な黒人のイメージが差別的であると絶版運動<sup>14</sup>が起きるようになります。それは日本にも波及していき、1990年代に各出版社は『ちびくろサンボ』の絵本を絶版としたそうです。90年以上のベストセラーだったので日本でもかなり絶版を惜しむ声があったそうです。

絶版になったのに自分はどこでそれを読んだのか全く覚えてないのですが、虎がバターになるシーンを覚えています。原作とは違うらしい、やたら黒いサンボも覚えているし、やたらうまそうなパンケーキも覚えています。ネットの動画で黒人差別反対運動をしている老人が公民権運動の時代について言及しているのを見ながらそのことを思い出したのです。

---

スコットランド、エディンバラ生まれの作家。1887年、セント・アンドルーズ大学を卒業。1889年にイギリスの軍医であった夫、ウィリアム・バーニー・バンナーマン（William Burney Bannerman, 1858-1924）の任地であるインドに行き、1918年までインドに在住。その後エディンバラに移住。『ちびくろサンボ』（1899）は、バンナーマンが出した10冊の本の内の初期作品。

#### 14 サンボの戯画的な黒人のイメージが差別的であると絶版運動

1930年代末、アメリカにおいて、児童文学における黒人表象のされ方について黒人抗議が起こる。主に研究者、エレノア・ウィークリー・ノーレンが児童図書における方言や性格描写に対する抗議から端を発している。新聞記者、東郷茂彦（1945-）によれば、①西欧社会において歴史的に黒人への蔑称である「サンボ」が使われている。②イラストにステレオタイプ化された黒人像が用いられている。③ストーリーが黒人を野蛮人として描いている。の三点を挙げ、『ちびくろサンボ』における黒人表象問題を整理している。日本においては児童文学家、灰谷健次郎（1934-2006）が『おやすみなさい「ちびくろ・さんぼ」』の中で「差別的」と指摘しているが他方、児童文学研究者、鳥越信（1929-2013）や児童文学作家、石井桃子（1907-2008）からの「良書」という評価も存在し、鳥越、石井の評価が現在でも優勢である。



そして、今日テニスプレイヤーの大坂なおみ<sup>15</sup>氏が警官による黒人射撃事件について抗議するために試合を棄権するというニュースが流れてきました。

当事者でしかわからないことを、こうだろうと予想したり、自分に置き換えて考えてみたり、勉強して考えてみたり、会社内で協議したりして考えることで見えてくることがあると思いますが、どうしても絶対にわからないのではないかというもどかしさと、自分が当事者として関わっているこの国だったり、小さいコミュニティ内の問題には目を背けているのではないかという気持ちが引っかかります。声高に主張できる世界の問題と、口籠ってしまう自分の近い範囲の問題のラインはどこにあるのだろうかと思うのです。

「ロゴ」

2025年の大阪万博のロゴ<sup>16</sup>が決まりましたね。ノミネート作品の5案が出ていた段階では、オリンピックのエンブレム問題が尾を引いて、みんな粗探しに躍起になっていたような感じがして、見ていてかなり気分が落ち込みましたが、決まってみるとみんなが嫌いな「デザ

---

<sup>15</sup> 大坂なおみ (1997-)

大阪生まれ、アメリカ、フロリダ州在住のプロテニスプレイヤー。アメリカ、ウィスコンシン州において、黒人男性が警察官に背後から撃たれた事件 (2020年8月23日付) をきっかけに起こった抗議運動に対して、大坂はテニスの全米オープン、準決勝の棄権表明を行う (同年8月26日付)。大坂は自身の SNS、ツイッターにて以下の様にコメントしている。「私はアスリートである前に1人の黒人女性です。黒人女性として、テニスよりも、もっと大事な問題があります。棄権することで劇的に何かが変わることを期待してはませんが、白人が主流の競技で議論を始めるきっかけにできれば、正しい方向に進むための第一歩になると思っています。警察官の手で黒人が虐殺され続けているのを見ると本当に胸が痛くなります。何度も何度も同じ話題を扱うことに疲れ切っています。いつになったら終わるのでしょうか」 (同年8月27日付、大坂なおみのツイッター)。

<sup>16</sup> 2025年の大阪万博のロゴ

2025年国際博覧会 (通称、大阪・関西万博) の運営主体である日本国際博覧会協会は、万博の公式ロゴマークを2019年11月から12月までに一般公募する。2020年8月25日、公募によって集まった5894件のロゴマークの中から選考委員の選考を経て、大阪のデザイナー集団、TEAM INARI (チーム イナリ) (2004-) の作品に決定する。代表のシマダタモツ (1965-) は、1970年に開催された大阪万博で展示された岡本太郎 (1911-1996) による作品、「太陽の塔」 (1970) に影響を受け、細胞を表現した赤い円や楕円の連なるロゴを制作したという。だが、そうした作者の制作意図とデザインを見た人々の反応は異なり、ツイッターではSF作品を引用し、「コロシテクン」と命名され、様々な二次創作が作成される事になる。

イナーが作ったロゴ」としてではなく、「キモかわのキャラクター」として一気に受け入れられた感があります。

オリンピックのエンブレム騒動<sup>17</sup>を見ているときはかなり気分が落ち込んでいました。椎名林檎<sup>18</sup><sup>[15]</sup>氏のことが好きなのですが、林檎さんが佐野研二郎氏のデザインが使えないのなら、新しい案を出すのではなく、かつての亀倉雄策<sup>19</sup>氏のデザインの日の丸の東京オリンピックエンブレムを、再度使えばいいのではないかと言っていたり、ツイッターで自分の考えたエンブレム選手権になっていたりとするのを見ているだけで気分が沈んでいました。エンブレムの内容どころではなくて、「デザイナー」という職業に対しての不信感だったり、な

---

#### <sup>17</sup> オリンピックのエンブレム騒動

2020年夏季オリンピック東京大会・パラリンピック東京大会の運営主体である公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（通称、東京2020組織委員会）は、2014年9月から10月までに「亀倉雄策賞」や「TDC賞」などのデザインアワードの賞を過去にふたつ以上受賞したデザイナーやグラフィックデザイナー、アートデザイナーに対し、大会公式エンブレムの募集を行う。2015年7月24日、公募によって集まった104点のロゴマークの中から選考委員の選考を経て、グラフィックデザイナー、佐野研二郎（1972-）のエンブレムが選ばれる。しかし、ベルギー、リエージュ劇場のロゴデザインを手がけたグラフィックデザイナー、オリビエ・ドビが佐野による公式エンブレムが自身による劇場のロゴデザインと酷似していると指摘する。本件に対し、佐野側はロゴのイメージについて同年8月5日の記者会見において、「Tのアル部分に1964年の東京オリンピックのロゴである日の丸をイメージして円を組み合わせた。」と発表し、盗作を否定するがその後も佐野によるデザインが他のデザインと酷似する点をネット上の第三者が指摘する。以後、佐野の事務所には様々な誹謗中傷メールが殺到し、佐野自身がデザインを撤回する（同年9月1日付）。

#### <sup>18</sup> 椎名林檎（1978-）

埼玉県出身のシンガーソングライター。自身の公式ツイッターにおいて、1964年に開催された東京五輪で用いられたエンブレムデザインの再利用を以下の様に指摘している。「斯くなる上は、亀倉雄策氏による1964年ロゴを再利用するのはいけないのでしょうか。年号は変更が必要ですけど。『東京・二度目の余裕』を見せていただきたい、などと思ってしまう」（同年同日付）

#### <sup>19</sup> 亀倉雄策（1915-1997）

新潟県出身のグラフィックデザイナー。東京オリンピック(1964)の亀倉によるロゴマークは、東京大会組織委員会のデザイン懇談会の中で、6名のデザイナー（河野鷹思（1906-1999）、亀倉雄策、杉浦康平(1932-)、田中一光(1930-2002)、永井一正(1929-)、稲垣行一郎(1953-)）を選び、指名コンペティションの結果、1960年6月、約20点の中から満場一致で選ばれた（加島卓『オリンピック・デザイン・マーケティング エンブレム問題からオープンデザインへ』2017）。亀倉は、ロゴマークについて「日本の清潔なしかも明快さと、オリンピックのスポーティな感動とを表してみたかった」と説明している。（亀倉雄策「オリンピックのシンボル」『東京オリンピック：オリンピック東京大会組織委員会会報』（第二号）1965年7月26日朝刊）

なんとなくお高く止まっているらしい彼らのイメージへの苛立ちをぶつけているような感じでした。僕は美大が大好きなので、美大を出た人は勝手に全員仲間だと思っています。仲間を泣かせる奴は許さねえぞという気持ちになってしまいます。

今までエンブレムというものに注目したことがなかったので、この件からいろいろ考えてみるが増えました。

大阪万博のロゴ募集があった時、そういえば唯一行ったことのある万博の愛地球博<sup>20</sup>はどんなデザインだったかと調べてみたら、めちゃくちゃ凄かった。

愛地球博の文字のロゴマークでなく、シンボルマークにとっても感動したのですが、大貫卓也<sup>21</sup>氏というデザイン界ではスターの人らしい方のデザインでした。(デザイン界のこととか疎すぎて全く知らなかった) 愛地球博で言いたいことの全部みたいなロゴだった。感動した。全部じゃん。こんなシンプルなマークのデザインなのに全部じゃん。すげえなあ。すげえなあ。まさに象徴！ ついこの間、閉園した「としまえん」の有名な広告なんかも彼でした。デザイナーの人からしたら常識なんだろうけど、知らなかったので感動しました。デザインに興味を持って、図書館の ADC 年鑑<sup>22</sup>のバックナンバーをパラパラリと見たのですが、去年のグランプリが大貫卓也氏の全仕事作品集で、それをみて欲しくなったのですが、もうプレミアがついていて中古で8万くらいで売られてました。買えない。

---

<sup>20</sup> 愛・地球博(2005)

愛・地球博は、2005年、愛知県、永久手町（現・長久手市）と豊田市、瀬戸市において行われた国際博覧会を指す。シンボルマークの制定では「市民参加型」という考え方を重視し、公開セッションを名古屋と東京で開催する。まず、「国際指名コンペティション」を開き、10名のデザイナーを選出する。提出された40作品の中で、公開セッション参加者を対象にした投票形式の市民審査を実施した。その上で大貫卓也（1958-）のデザインが選出されることになる。（『EXPO2005 AICHI だより No.9』2000年6月8日付）

<sup>21</sup> 大貫卓也（1958-）

東京都生まれのクリエイティブディレクターである。1980年に多摩美術大学グラフィックデザイン科を卒業。同年に博報堂入社後、「としまえん」の広告デザイン、「プール冷えてます」（1986）や「史上最低の遊園地」（1990）を発表。「プール冷えてます」では東京ADC賞を受賞している。

<sup>22</sup> ADC年鑑(1957-)

ADC賞に選ばれた広告が掲載されている書籍。1957年から毎年発刊されるこの書籍は、2018年より『Art Direction Japan / 日本のアートディレクション』と名称を変更し、現在も継続して発刊されている。尚、東京ADC賞は、東京ディレクターズクラブ（1952-）の会員によって審査される広告賞を指す。

それで展示の話に戻ると、チェーホフのかもめで大成功した劇団のモスクワ座は、それを記念してかもめの座章を使っています。ガーディアン・ガーデンで打ち合わせをしている時に聞いたのですが、リクルートの1つ前のロゴはかもめモチーフで、そのデザインは亀倉雄策氏がしていたそうです。

とにかくカッコいいデザインで感動したいです。SNS がなんかの拍子で消滅したらそういうものが出てくるのかなーとかぼーっと考えたりしてるわけですが、そんなことよりも、大貫卓也の全仕事作品集をあげてもいいよという方を大募集しています。

### 「柔らかい彫刻」

クレス・オルデンバーグ<sup>23</sup>が最初にグリーン・ギャラリーでソフトスカルプチャー<sup>24</sup>[21]を発表する前に、それは草間彌生<sup>25</sup>[22]がやっていた。プリントのパターンで作品を作るのもアンディ・ウォーホールよりも先に草間がやっていた。2人とも草間の作品を見てからそれらを作った。日本人が好きな言い方だと「パクった」となるのでしょうか。とにかく草間彌生は先駆的な表現をやっていたけれどなかなか認められなかった。

というような話を学生の時に聞きまして、草間彌生というのはすごい人なんだと思ったわけです。なんとなく、芸術祭を観に行けばやたら作品がある人、アイコンクに消費されて

---

<sup>23</sup> クレス・オルデンバーグ (1929-)

スウェーデン、ストックホルム出身の彫刻家。日常の製品を巨大化し、柔らかい素材を用いて製作する作家として知られている。1960年、オルデンバーグは、性器のイメージについて以下のように述べている。「私にとって、ロンドンには上下運動する男根のイメージをかきたてた。たとえば潮の干満がそうであり、ミニスカートとひざ、スカートとブーツの間に見える足の部分がそうであり、口紅の上下運動がそうであり、煙草の吸い口がそうである。」（『中原佑介美術批評 選集：第三巻 前衛のゆくえーアンデパンダン展の時代とナンセンスの美学』「巨大化願望 クレス・オルデンバーグ」 pp.238）

<sup>24</sup> ソフト・スカルプチャー (soft sculpture)

邦訳では、「柔らかい彫刻」。一般的な彫刻や立体が石や木を彫り、金属を寿像するなどの硬い素材で制作される作品に対して、柔らかい素材（布や糸などの繊維やゴム、脂肪などの可塑性のある素材）を用いて制作される彫刻作品に用いられる言葉である。

<sup>25</sup> 草間彌生(1929-)

長野県、松本市出身の前衛芸術家。近年、「水玉の女王」や「yayoi ちゃん」の愛称で知られ、祝祭性の強い作品がもてはやされる印象もあり、幼少期からの幻視や幻聴といったオブセッションを乗り越えるため、網目模様や水玉模様を製作する姿勢が見えない事もある。「あいちトリエンナーレ 2010」では、「祝祭性」をテーマに草間彌生の作品がメインビジュアルとなっている。

るなんでも水玉の人とかそういう認識を、彼女のニューヨーク時代の活動のドキュメンタリーを見たり、本を読んだりして知って、改めたことがあります。自分にはできない。アジア人の女性の草間の作品は、白人男性が作っていたアートシーンの中ではとにかく認められるのに時間がかかったのだと思います。同じ表現をやったのなら草間彌生よりもクレスオルデンバーグやアンディウォーホールが認められる空気があったんだとなんとなく想像できるのです。

ヘザー・レンズが監督した「草間∞INFINITY」という草間彌生のドキュメンタリーを見ていたのですが、クレス・オルデンバーグの展示をみた草間に彼の奥さんであるパット・オルデンバーグ<sup>26</sup>がアイムソーリーと謝ったというエピソードが草間の口から語られていました。それ以上は語られていなかったので詳しいことはわかりません。女性差別、人種差別も横行していた時代であるし、裁縫の作品を最初にやり始めて、受けるべき彼女の称賛を自分の旦那が取って、それに加担したことへの謝罪だったのでしょうか。パットオルデンバーグは、クレスオルデンバーグの作品をかなりの割合手伝っていたので罪悪感があったのでしょうか。しかしただの予想で真意はわかりません。

自分も草間彌生さんの作品をパクすることはできないものかと、現在六本木の森美術館で開催されている「STARS 展」<sup>27</sup>を観に行きました。ペニスを模した詰め物をした布をボートや椅子や、脚立に貼り付けている作品を初めて生で観ました。

自分の展示ではそれがカモメになって飛んでいます。

そういえば、『カモメのジョナサン』の日本語版の翻訳者の五木寛之<sup>28</sup>氏が、カモメのジョナサンの中にはなぜ男性のカモメしか出てこないのかということについて言及していたのを思い出しました。女性のカモメはジョナサンの母親しか出てこず、ジョナサンが行き着く高次の世界の住民も、美しい友情を育む仲間も、ジョナサンを認めない敵も全員が男のカモ

---

<sup>26</sup> パット・ムシンスキー (Pat Muschinski)

パフォーマー、オルデンバーグ最初の妻であり、オルデンバーグのパフォーマンス、「ハプニング」のパフォーマーとしても活動。オルデンバーグの初期の多くの彫刻を裁縫した。

<sup>27</sup> 「STARS 展」(2020-2021)

森美術館で行われている展覧会、「STARS 展：現代美術のスターたち—日本から世界へ」(出展作家：草間彌生、李禹煥(リ・ウファン)、宮島達男、村上 隆、奈良美智、杉本博司 会期：2020年7月31日-2021年1月3日)をさす。

<sup>28</sup> 五木寛之(1932-)

本名、松延 寛之。福岡県出身の小説家。高校時代にゴーゴリやチャーホフを読み直し、同人誌にユーモア小説を掲載している。『蒼ざめた馬を見よ』(1967)で直木賞を受賞。70年代には、テレビ番組、「遠くへ行きたい」の製作に関わる。

メです。恋愛やセックスについても不自然なくらいに切り離して、ジョナサンたちの求道的な姿勢について書いていると言及していました。

自分が作ったカモメも草間彌生のペニスを模したソフトスカルプチャーを模しているのが全員、男性のカモメなのでしょうか。

#### 「コメディアン」

高校生の時に、美術作家になりたいと思った時に考えもしなかったことを、美術作家を始めてから考えなくてはいけなくなってきました。高校生の時点で美大の学生はほとんどが女性で、美大を出た作家の数になると歳を取るにつれてその数が逆転していつていることも知っていました。そういうふうに聞かされていました。ジョナサンが行った高次の世界に当たり前のように男のカモメしかいなかったのと同じくらい、それをそういうものと受け取っていたのです。その当たり前の下にエグいくらいの犠牲があるのだと、そして自分の制作を支えている犠牲についても知りつつ、そのまま今日までいます。ジョナサンが行った天国のような世界も誰かにとっての地獄かもしれない、と思います。美術の世界にそれほどまでにコミットできていない自分は半ば観光客のような気分で、憧れと共に美術作家を見ていました。華々しい成功や、悶々鬱々とした暮らしや、笑えない失敗とか、、、これを見てきた自分の今までの旅は、天国煉獄地獄を旅する、ダンテの神曲みたいだなと思って調べて見たら、神曲というのは元々の原題が、喜劇を意味する「コメディア」だったそうです。カテランのバナナもタイトルが「コメディアン」で、もしかしたらバナナも天国煉獄地獄を観光してきたのかもしれない。僕の作ったカモメはカテランのバナナなので地獄も天国も見る観光客でもあるのだと思います。

自分はホモソーシャル的な、マッチョ的な美術の世界に憧れを持っていました。かつて。その場所が過去にはあった。今もあるけど行きたくない。自分は着地場所をなくしたカモメのような心境です。チェーホフのかもめに出てくる居場所が宙ぶらりんになったニーナが、「私のかもめ、、、」と漏らすのですが、そんな気分です。いつかアーティストを7人くらい宇宙旅行に連れていってくれる金持ちの実業家が、そのロケットに自分を乗せてくれたら地球を見て真っ先に「私はカモメ、、、」と言ってやろうと思います。